

## MAGNUM プロジェクト 近傍 1 型 Seyfert 銀河の長期紫外スペクトル 変動と光度変動機構への示唆

S13a

坂田 悠、峰崎 岳夫、吉井 譲、越田 進太郎、諸隈 智貴、青木 勉(東大天文センター)、  
小林 行泰(国立天文台)、塩谷 圭吾(JAXA)

活動銀河核の降着円盤放射とその光度変動の機構を調べるため、我々は光度変動にともなう紫外線可視連続放射のスペクトル形状変化に注目してきた。とくにこれまでおろそかにされがちであった母銀河や狭輝線放射などそのフラックスが時間変化しないと考えられる成分に注意して解析を行ってきた。この結果、セイファート銀河の可視連続放射のスペクトル形状は光度変化によらずあまり変化しないいっぽうで、大光度クエーサーの紫外線連続放射は明るくなると青くなる傾向を示すことがわかった (Sakata et al. 2010; Sakata et al. submitted)。

本研究ではさらに近傍セイファート銀河 6 天体について光度変化にともなう紫外線連続放射のスペクトル形状変化について調べた。Dunn et al. (2006) による IUE 衛星による活動銀河核の紫外線スペクトルモニターデータから、輝線の混入を避けるため 2 つの波長帯 ( $1350\text{\AA}$ 、 $1810\text{\AA}$ ) を選んだ。また HST 画像から得られた母銀河可視光度から SED を仮定してその紫外線光度を求めた。この結果、この 2 バンドのフラックスを flux-flux 図上にプロットすると幅広い変光範囲に渡り直線状に分布し、この分布のフィット直線の延長上に母銀河成分がプロットされるがわかった。これはセイファート銀河においては紫外線連続放射もそのスペクトル形状が光度変化によらずあまり変化しないことを強く示唆する。本報告ではさらに、セイファート銀河における紫外線可視連続放射および大光度クエーサーの紫外線連続放射のスペクトルおよび変光に伴うスペクトル形状の変化が、標準降着円盤モデルにおける降着率の変化で統一的に解釈できることを示す。